

本人とともに取り組む暮らしやすい地域づくりについて

－ 福岡県大牟田市における実践を通して －



医療法人 静光園 白川病院 医療連携室長
猿渡 進平

saru@shirakawa.or.jp

本日、お話ししたいこと

- 認知症を地域で支える（今までの活動）
- 実践からの違和感
- 認知症とともに生きる街づくりとは

本日、お話ししたいこと

- 認知症を地域で支える（今までの活動）
- 実践からの違和感
- 認知症とともに生きる街づくりとは


医療機関で働くSWとして本人や家族から聞く声。

【本人の声】

- ・家の様子が気になるので自宅を見に行きたい。
- ・仏壇に線香をあげるのが、私の役割。
- ・子どもたちとの思い出が詰まった家に帰りたい。
→ 自宅に退院したい。

【家族の声】

- ・心配なので自宅への退院は考えていない。
- ・自宅に帰ってきてても、対応できる人がいない。
- ・近隣住民に迷惑をかけたので、施設を検討している。
→ 自宅に帰ってきてもらおうと困る。

 結果、施設に退院せざるをえない患者さんが多い。

□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

● 認知症SOSネットワーク模擬訓練 SINCE 2004 との出会い

1. 認知症の人と家族を支え、見守る地域の意識を高め**認知症の理解**を促進していく
2. 高齢者を隣近所、地域ぐるみ、多職種協働により可能な限り、声かけ、見守り、保護していく**実効性の高いしくみ**の充実
3. 認知症になっても安心して暮らせるために、「**安心して外出できる町**」を目指していく



○各小学校校区での実行委員会の設立

実行委員会メンバー（校区によってメンバーは異なる）

- 民生委員・児童委員協議会
- 校区町内公民館連絡協議会
- 校区社会福祉協議会
- 地域の医療、介護事業所(事務局)
- 地域包括支援センター
- 認知症ライフサポート研究会運営委員
- 大牟田市 福祉課

□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

第1回 白川校区 認知症SOSネットワーク模擬訓練



開催日：平成19年9月23日(日)

参加者：9名

外出役：1名

訓練結果：2時間歩き1件の声掛け

実行委員を中心に事務局に集合し開会式
(認知症サポーター養成講座・声掛けの方法
・道に迷った方を見つけた際の連絡先等)
を実施。

その後に、外出役に対し、声をかける。

*連絡網無し。啓発メイン。

□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

現在までの認知症SOSネットワーク模擬訓練の参加者状況

	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度 (2回)
外出役	1名	6名	20名	26名	26名	26名	26名	50名	26名	13名
参加者	9名	87名	240名	165名	167名	162名	185名	232名	192名	202名
声かけ	1件	35件	361件	247件	268件	317件	299件	492件	304件	151件



□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

・退院前の担当者会議の場面



□ 認知症を地域で支える（20年の実践）

・ 行方不明後の支援会議



本日、お話ししたいこと

- 認知症を地域で支える（今までの活動）
- 実践からの違和感
- 認知症とともに生きる街づくりとは

□ 実践からの違和感

- ・ 模擬訓練当初から校区の代表者として活動してきた住民の声

○ 模擬訓練の目的である“啓発”と“連絡網(セーフティーネット)”の整備、そして、その活用ができるようになることを目的に14年間取り組んできた。

その結果、多くの住民が活動に参加するようになり「地域の中での体制」が構築できつつある。

熱心に「認知症の人を支えましょう」と言い続けてきた結果だと考えている。

○ 一方では懐疑的になっていることもある。

長年、この訓練に携わってきた人が認知症になり、閉じこもりがちになっている。これは「認知症になっても安心して外出できる」という目的とは逆の結果である。

○ 私自身に置き換えてみると、認知症になったら「恥」をかきたくないので自宅に引きこもるだろう。

自分の中の認知症像が「それ」であるとすれば、多くの住民も「そう」である。訓練が「それ」を作ってきたのかもしれない。

私たちは、

「誰のため」に「何のため」に活動をしてきたのか

本人の声を聴くことを起点に

本日、お話ししたいこと

- 認知症を地域で支える（今までの活動）
- 実践からの違和感
- 認知症とともに生きる街づくりとは

- ① **本人同士の活動を推進し、声を形へ。**
- ② **専門職の固定観念を変えて、個別の声を形へ。**

□ 認知症とともに生きる街づくりとは

- 認知症の本人同士のミーティング（市内1カ所）
- 認知症の人と家族の一体的支援プログラム（通称：ミーティングセンター（市内4カ所））



情報について



- 情報が無くて不安になる。
- インターネットは使えず、本屋には本が少ない。
- 図書館では見つけることが出来なかった。

認知症にやさしい図書館 & 博物館プロジェクト



外出について



- 認知症 = 声掛けが必要な人というのは悲しい。
- 自分の好きな時間に外出したい。
- 自分の力で自宅に戻りたい。

□ 認知症とともに生きる街づくりとは

「大牟田市ほっと安心ネットワーク模擬訓練」と「タウンウォーク」

●本人の予防的（備え）な取り組み

①地図アプリを活用した練習

自分で出来ること
「タウンウォーク」



②ヘルプカードを使った練習

この住所を教えてください 東京ドームに行きたいです	家への帰り道を教えてください 目的地は〇〇保育園です おまじで言ければ帰れます	私の名前と住所を教えてください 090-1234-5678 (東京都・地域包括センター) お名前は太郎 お電話は〇〇-〇〇〇〇
私の近所の名前を教えてください JR西荻窪駅で降りたいです	ノートに書いて教えてください あなたのお話を覚えておきたいです	この練習を教えてください セルフレジで支えたいです



●周囲が考える共生的な取り組み

周りが出来ること
「大牟田市ほっと安心ネットワーク模擬訓練」

○ いざという時の情報伝達&検索

社会参加や働く



- まだまだ身体を動かしたい。
- 物忘れはあるけど、何かに貢献したい。
- 働きたいけど、普通の仕事（常勤）は難しい。

認知症の人の就労や社会参画WS



- ・ 企業関係者
- ・ 高齢福祉関係者
- ・ 行政関係者



新たな社会支援の創出に



洗濯作業に取り組み施設利用者たち

大牟田内のデイサービス利用者が、市内の養老事業所で生き生きと働く姿が見られている。仕事に汗を流しているのは要介護の高齢者たちで、働くことで価値を手にする。現役の時よりかはるかに、自分たちも、またまた社会につながって役に立つことができると、思いが自信につながり、日々の生活にも張りが出ていこう。高齢者として、働くことが新たな生きがいになっている。

この取り組みは、同市 掛けマツチンクを図る健康福祉推進室健康長寿支援課が中心となり、新たな地域共生を目指す。新たな社会支援の創出を目的に行われている。これまで事業所と福祉施設に呼び

要介護高齢者 生き生きと

大牟田市内のデイサービス利用者が、市内の養老事業所で生き生きと働く姿が見られている。仕事に汗を流しているのは要介護の高齢者たちで、働くことで価値を手にする。現役の時よりかはるかに、自分たちも、またまた社会につながって役に立つことができると、思いが自信につながり、日々の生活にも張りが出ていこう。高齢者として、働くことが新たな生きがいになっている。

ピアス職機、規模多機能、能利居宅介護事業所、リビングアール小浜、石橋ホーム、いまやまの家といった各施設を利用する高齢者たちが、仕事に取り組んでいる。

仕事内容は、要介護の高齢者が安全に取り組みすることができ比較的軽度なハンを買ってあげました。などの声が聞かれています。そして「自分で働いて手にしたお金だから、

事業所が軽作業提供

市担当課呼び掛けて

大牟田

なもの。事業所側は労働力の確保と社会貢献、高齢者側は社会のつながりと生きがい創出というメリットがそれぞれある。何より、わずかながら、誰に気兼ねすることなく使えて、とてもうれ

大牟田市の「デイ利用者ら1時間程度」の取り組みは、社会的に孤立している高齢者が、自己を取り戻し、生活能力を回復させるには、自立支援にもつながる。この取り組みは、さまざまな分野で自立支援のきっかけになれば、大きな期待を寄せている。



ハリ特化型デイサービス利用者が働く本質は、1時間程度で内容は軽重の洗車。1回につき1人が作業に取り組み、安全面を考慮して必ず1人以上のデイサービスの職員が補助に付。

現在、同店で働いているのは要介護1、2などの高齢者。2月末から練習を行い、正式に3月から働かされた。最初は1時間かけて1台を仕上げたのも難しかったが、今は2台を仕上げることができるようになりました。

同施設を運営する森健一朗さんは「最初は戸惑いもありました。本質的に、日常生活の活動性も上がっていますと驚きを隠さない。

高齢者たちは、働くことで「また自分たちはやれることがある」と自信を持つようになり、できなくなっていた「デイサービス」の姿も見えるようになった。

① **本人同士の活動を推進し、声を形へ。**

② **専門職の固定観念を変えて、個別の声を形へ。**

□ 認知症とともに生きる街づくりとは（専門職の意識変容）

- ・ 個人からの展開手段（専門職が活用するシート）

写真

氏名

呼ばれた名前

ふりがな

知る楽しさをもっと。

やりとり手帳

写真

氏名

呼ばれた名前

ふりがな

谷口 進平

知る楽しさをもっと。

やりとり手帳

□ 認知症とともに生きる街づくりとは（専門職の意識変容）

- ・ 個人からの展開手段（専門職が活用するシート）

1-5 わたしの足あと

わたしの足あと

時代	時代	時代	時代	時代	時代
年	年	年	年	年	年

主なできごと

コメント

歴代の趣味とひとこと

伝えたいこと、メッセージなど

1-5 わたしの足あと

わたしの足あと

時代	時代	時代	時代	時代	時代
1950年	1960年	1960年	1970年	1980年	2000年

主なできごと

コメント

歴代の趣味とひとこと

伝えたいこと、メッセージなど

釣りに行きました

□ 認知症とともに生きる街づくりとは（専門職の意識変容）

Oさんは、娘さんとの2人暮らしの80代の女性です。介護保険の認定は要支援2でした。

地域包括支援センターに勤務するTさんは前任者から引き継ぎを受け野田さんの介護予防支援計画の担当していました。

介護保険のサービスはヘルパー（家事支援）とデイサービスです。

Tさんは、「ご家族からも何の希望がないので、とりあえずこのままで。」と特に何も考えることなく、毎月の計画を立てていました。

やりとり手帳を実施して、本人は元々保育園の園長で、大牟田にある動物園は園児の引率で何十年間も通っており、また行きたいと思っていることが分かりました。

Tさんは、思い切って本人と動物園に行きました。

本人はとても喜び「ここは、キリンがいたのに象がいる！」と、見たこともない表情で、とても嬉しそうに語ってくれました。いつもより足取りが良いように感じましたが、残念ながら途中で歩けなくなり野田さんは最後まで辿り着けずとても悔しかったです。竹下さんは、「これは高齢者であれば、どなたでもあることではないか」と思い、動物園の園長に事情を話をして、地元の家具屋さんのご協力のもと、ベンチを数台設置しました。



□ 認知症とともに生きる街づくりとは（専門職の意識変容）

kさんは、妻と2人暮らしの70代の男性です。

数年前に物忘れが始まり、妻に対する暴言等があったために認知症外来を受診し診断を受けました。その後、本人が閉じこもりがちになっていることを妻が心配し介護保険の認定を受け結果は要介護1でした。

その後は地域包括支援センターやケアマネジャーが対応し、現在はデイサービスを週に3回利用しています。

本人とやりとりを実施して、元々、学校の教員や塾の講師、また市議会議員等の経歴がある本人は、いまでも「人の前で話すのが好き、社会の為に役に立ちたい」と強く願っていることが分かりました。

元々小中学校では「認知症教室」がなかったので、支援者は「本人に認知症のことを話してもらえる機会」に出来ないかと調整しました。

本人は始めは躊躇してましたが、「私でできることなら」と引き受けてくれました。いざ、生徒の前に立つと「自分のこと」「認知症になってからの体験」「認知症の人への接し方や工夫」等を話してくれました。

いつも、物寂しそうにしている本人とは全く違いました。帰りは足取りが軽く「次はいつあつとね？」と嬉しそうに話してくれました。そのことを奥さんに話したところ、奥さんは苦笑いをしていました。次回は奥さんも誘ってみようと思います。



最初の、認知症の役-シは、軽い病気、人の名前も忘れるのがあたりまえ、
接しかたを考えた方がいいと思っ、していたけど、
認知症になつても、いまでも通い生活もかめらない人かいる、心配さあ、
すたから、かみいてしまう。接しかたは、今、おれ、おれ、おれ、おれ、
ありがたいな、最後には、夢を持つことが、不審、ということが、
今日は、本当に、ありがたう、ござい、ました。

今まで認知病に、ついて、学んで、最初、物忘れが多く、特別に、しない、
けない、と思っ、いたけど、いろいろ、な、方、か、話、を、聞、い、た、
認知症の人で、ポジティブで、物忘れ、も、そ、ま、で、い、ど、も、な、く、
い、を、招、必、要、は、な、く、み、な、一、緒、で、自、然、に、生、活、す、こ、
話、を、し、て、く、れ、た、方、か、
話、を、し、て、く、れ、た、方、か、

□ 認知症とともに生きる街づくりとは

- ・ 認知症当事者 100人インタビュー（個性の発信と事業の見直し）

80代・女性

無視されるのは嫌。お隣の人と仲良くしていきたい。

みんなから見守ってもらっている。

散歩するのは、学校の校庭。3周グルーっと回って帰ってくる。家が見えているから、迷わず、いつでも帰ることができる。

のんびり、幸せに生きたい。



70代・男性

認知症になっても変わらない。

近所の人と仲良くすることが必要。

楽しく明るく過ごすことが、認知症の進行を遅らせることになるんじゃないか。だから、みんなと話したいし、頼られたい、人の役に立ちたい。

困ったことより、嬉しかったことを聞かれたほうが嬉しい。困ったことは、思い出すのは辛い。



認知症の本人とともに、暮らしやすい地域をつくろう！

“支援する人”と“される人”を超えて。水平な出会いと関りを。

For から With への転換

